

<書評と紹介>佐藤幸夫・堀司郎編著 『魂の道標へ：池田勇作と郁の軌跡』

YOSHIDA, Kenji / 吉田, 健二

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

592

(開始ページ / Start Page)

77

(終了ページ / End Page)

78

(発行年 / Year)

2008-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003293>

佐藤幸夫・堀司郎編著
『魂の道標へ』
——池田勇作と郁の軌跡』

紹介者：吉田 健二

1935（昭和10）年3月、日本共産党中央委員会が壊滅して以降、コミニストらはそれぞれの地域や職場で組織再建をめざす非公然の活動を展開した。これらのコミニスト・グループを指導した機関の一つに岡部隆司、長谷川浩、伊藤律らの第2次日本共産党再建指導部があげられる。

本書は、新進のプロレタリア作家で、この第2次日本共産党再建指導部のメンバーであった池田勇作と妻郁の軌跡をまとめたものである。なお池田は1940年6月25日治安維持法により検挙され、44年3月13日に豊多摩刑務所（東京）で獄死している。享年30歳だった。妻郁も1945年8月13日、敗戦直前に死去した。

※

本書は3部構成である。第1部と第2部は池田勇作の「遺作集」で、第1部は東京電機学校（現東京電機大学）を中退、郷里・山形県鶴岡市でプロレタリア作家を志していた時期の著作18篇、第2部は1936年2月に上京し、非公然の活動中に出版した小説『河岸』（朝陽社、1943年9月）や、労働評論「工場災害について」（『中央公論』第54巻7号）、ルポルタージュ「機械工具の生活譜」（『経済ニッポン』1943年5月）など4篇を取めている。第3部は、佐藤

幸夫「池田勇作とその妻郁——生い立ちと生涯」、堀司郎「近代鶴岡の文芸——プロレタリア文化運動と池田勇作」、池田道正「（解題）池田勇作——魂の道標」など、池田勇作に関する論稿と「年譜」が収められている。

※

10数年前、筆者は「雑誌『機械工の友』と『機械工之知識』——戦時抵抗の一形態」と題する論稿を発表したことがあった（本誌第425、430、441、444号）。池田は1937年以降、非公然の活動に入るが、検挙されるまで生活と活動の拠点としていたのが機械工の友社であった。機械工の友社は、戸田慎太郎が1938年9月に有賀新や米原昶らの協力を得て設立した技術出版社で、技術雑誌『機械の友』（月刊）を発行していた。この雑誌はたんなる機械工向けの技術雑誌ではなく、技術指導や技術教育に名を借りた政治的な偽装雑誌で、日本共産党の再建を展望しつつ、労働者に対する階級的な指導を意図していた。池田は『機械工の友』の編集部員として、野本正治ら日本国有鉄道従業員の共産党再建活動（いわゆる「国鉄共産党」の活動）を指導していた。

筆者が前掲の論稿を発表した時点で、池田に関しては内務省の『特高月報』や司法省の『思想月報』など官憲の文献以外に手掛かりは得られなかった。池田勇作とはいかなる人物か。紹介者自身、池田に関しては学歴、職歴、活動歴を含めてその足跡は杳としてわからなかった。池田が検挙されたと同じ日、阿部郁も検挙されている。筆者は、この阿部郁が郁の旧姓であり、勇作とは同郷で、日本女子大を卒業したのち勤めた紀伊国屋で、夫と同じグループにあって共産党再建のオルグ活動を担っていたことは本書を手にするまで思いも及ばなかった。

本書で特筆される第一の意義は、佐藤幸夫、堀司郎、池田道正3氏の調査により、池田勇作

と郁の生涯と活動に関して文献資料の裏づけをもってその全容を明らかにしたことにあるだろう。

本書により、機械工の友社を拠点にした池田のオルグ活動についてその実態がほぼ究明されたといえる。池田は、第2次日本共産党再建指導部においては岡部隆司と長谷川浩に直結し、日本国有鉄道従業員らの組織再建についてのみ伊藤律との連絡・指導をたもっていた。第2次日本共産党再建指導部は、1940年6月25日に池田の検挙、同28日に長谷川と岡部が検挙されて崩壊するが、本書によれば、池田らの検挙に伊藤律が深く関係していたのであった。

※

本書は、近代山形における社会運動史研究においても貴重な文献となっている。これまで近代山形県の社会運動を記録した文献として『山形県警察史』（1971年）、『山形県史』第5巻（1986年）、山口實『青春群像——社会運動の創始者たち』（1981年）、阿部五郎・後藤太刀味『探索・近代山形の社会主義運動』（1992年）などがあげられる。また2007年9月に、治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟山形県鶴岡田川支部編『不屈の人々—社会進歩をめざした庄内の先覚者たち』（記念講演集9）も発行されている。

これらの文献では『山形県史』第5巻がたんに史実を発掘し、客観的で公正な分析を試みていて、かつて当研究所における地方社会運動史研究プロジェクトにより他の県史に比べて「出色の出来栄え」（本誌第356号）との高い評価がなされていた。

ところがこの『山形県史』第5巻も他の文献も、1930年代の半ば以降の庄内地方、とくに鶴岡地区におけるプロレタリア文化運動については運動の発掘や調査研究において手薄となっていた。

前述したが、本書の第1部と第2部に池田勇

作の著作が収録されている。これらの著作はいずれも浮田進一郎、牧本進、生田修、最上駿作などのペンネームで発表されたもので、人物の特定がなされなかったことと相俟って、池田勇作の作品の検討やプロレタリア運動における彼の評価についてはこれまで試みられなかった。

前掲の佐藤幸夫、堀司郎の論稿で子細に紹介されているが、池田勇作は、1930年代の後半期、庄内地方におけるプロレタリア文化運動の中心点に位置していた。佐藤氏の言葉を借りるならば、池田は非公然活動の任務を得て上京するまでは「庄内のプロレタリア文化運動の旗手」（294頁）として存在していた。

事実、池田は、日本プロレタリア作家同盟山形支部準備会、日本プロレタリア演劇同盟庄内支部準備会の設立者であって、池田の著作は、これらの活動を通じて生み出されたものであったという。

本書は、埋もれていたプロレタリア作家に光を当てただけでなく、庄内地方におけるプロレタリア文化運動を掘り下げて紹介しており、近代山形県の社会運動の実像をより豊かにした点においても評価される。

なお、本書に解題を執筆している池田道正氏（山形大学名誉教授）は、勇作の家系の継承者である。氏によれば、本書は、治安維持法の犠牲者としての「池田勇作と郁の名誉を回復」（「まえがき」）し、かつ「池田勇作と郁を心から尊敬し、追悼するつもりで筆を執った」という。

（佐藤幸夫・堀司郎編者『魂の道標へ——池田勇作と郁の軌跡』2007年7月、企画・発行者池田道正、A5判・394頁、頒価1500円）

（よしだ・けんじ 法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員）